

## 公 開 講 演 会 要 旨

**一乗谷朝倉氏遺跡について** 福井市足羽町一乗谷にある朝倉氏遺跡の発掘調査と史跡整備に当研究所が参画してすでに4年経過したが、その間に同遺跡は特別史跡に格上げとなり、区域も278haに拡大された。遺跡全体の概略と、現在までおよそ6,000m<sup>2</sup>におよぶ発掘調査結果を紹介した。年報1969, 1970参照。(牛川喜幸)

**手彫り唐草文瓦について** 杏葉唐草文とか銀杏唐草文等と呼称され、法隆寺の若草伽藍跡から出土することで著名な全パルメット唐草文を手彫りで刻出した軒平瓦の製作は、ヘラで下絵を任意に描き、手彫りしたものと考えられていたが、フリーハンドで下絵を描いたものではなく、切り抜きの型紙状のものを使用して、下絵を描いたものであることが明らかとなった。すなわち、7葉の各パルメットの中央部、扇形空間の上部に小孔があり、ピン状のもので切り抜き型をとめた痕跡を認めることができる。この切り抜き型の材質については明確でないが、各パルメットをそれぞれとめていることからみて軟質な皮革等であったことが推測できる。これら手彫り唐草文瓦の製作技法、分類を中心に、昭和43・44年度若草伽藍跡国営調査の概要と出土軒瓦の分類・編年等についてもふれた。(松下正司)

**写真測量による遺跡の測定について** 本研究所では写真測量の技術を文化財の調査研究に応用する試みをおこなってきたが、特に最近では、遺跡の測定にこれに応用する方法の開発研究を重点的におこなっている。これは従来の実測方法の不備をおぎなう目的と同時に、近年とみに増大の傾向にある開発による遺跡の破壊に対処するためでもある。これには様々な方法があるが、特に気球により気球塔載用に設計されたステレオカメラを用い、垂直に遺跡を撮影し $\frac{1}{40}$ ～ $\frac{1}{50}$ という大縮尺の実測図を得る方法が比較的有効である。また、この装置はクレーンによる懸下撮影も可能であり、気球の風に弱い欠点をおぎなえる。現在までこの方法により、平城宮遺構をはじめ難波宮、大宰府、弥生時代住居跡・群集墓等の撮影図化をおこなった。他に気球撮影に至るまでの経過および、他の文化財に応用した例等を紹介したが、これについては年報1964, 1969参照。(伊東太作)

**裁判至要抄について** 裁判至要抄は鎌倉時代初期に成立した法家の書で、相統法に関する条項に重点が置かれている。この相統法について平安時代末期に成立した法曹至要抄との間には法意に相違が認められる。更にこれを鎌倉幕府制定の御成敗式目と比較すると、法家の法意は決して固定されたものでなく、時代によって変化しており、公家法の中世化の過程を明かにすることができる。(田中 稔)

**奈良時代寺院建築の様式について** 奈良時代の建築は天平末年頃を境として前後の二様式に区分される。その一番目立つ特色は組物の肘木の長さが前期では長く、のびのびとしているのに、後期は短くなって組物が固い一体的なかたまりに変化することで、前者の代表が薬師寺東塔・東大寺法華堂、後者は唐招提寺金堂・室生寺五重塔などである。この変化は大斗

の幅に対する肘木長さの比率が最もよく示し、前者は2.4~2.9、後者は2.0前後である。この差は天平末年にそれまでとは異なる建築様式が中国(唐)から輸入されたのではなく、日本の中での変化らしく、東大寺大仏殿の造営で、短期間に大建築を作るための大量生産システムに適合する木割がこの時に生まれたものと考えられる。(鈴木嘉吉)

**薬師寺金堂本尊の荘厳について** 「薬師寺縁起」および「七大寺巡礼私記」によって、薬師寺金堂本尊の荘厳を復元的に考察し、また中国・朝鮮ならびにわが国の上代における光背・台座などの形式変遷の過程から、薬師寺本尊の場合は飛鳥時代以来の伝統的古制を踏襲した舉身光・宣字型裳懸台座であることを考証した。そのうち光背の7体化佛説については本文2ページ参照。(長谷川 誠)

**地方寺院成立の背景—川原寺式瓦の分布に関連して** 美濃の古代寺院を特徴づけるものは、川原寺系の瓦の分布があり、寺院跡14か所のうち11か所におよんでいる。分布する郡は不破、大野、席田、厚見、牟婁、各務、可児の各郡である。この分布は寺院成立の事情が大和と密接に関係することを示す。その契機は壬申の乱にあると考える。乱で活躍した美濃の地方豪族は、身毛君、村国、勝、宮勝氏などで舎人となり直接大和勢力と結んだ有姓者や帰化人系氏族である。これら各氏族の本拠地である牟婁、各務、不破郡に分布する寺院はおそらく乱に於ける功績による論功行賞の結果と考える。一方、寺院の分布しない郡(安八、本巣、方県、加茂、恵那)についてみるに、これらの郡には大宝戸籍等に散見する国造某、県主某などというかつての美濃豪族の後裔の分布が多い点が注目される。さらに名代、子代の存在、建部、伊福部など部民の分布とも合致しているこれらの郡の豪族は、かつての職名がウジ名となるような特異な扱いを中央からうけ有姓者として認められなかった豪族であり、この地域が早くから、大和勢力のもとにあり旧国造の本拠地が根強く支配的に残っているといえる。7世紀末美濃地域では、勝姓などの姓を与えられた一定の地位を得た新勢力に、旧勢力の二つがあったと考える。寺院の建立は、大和勢力が壬申の乱を背景に成し得たものでありこの時点で美濃における新旧豪族の交代があったことが考えられる。(八賀 晋)

**唐招提寺金堂本尊の構造について** この講演では、昭和46年7月の唐招提寺金堂本尊盧舎那仏坐像の調査に基づき、美術院資料の内容紹介をかねて、金堂本尊の本軀、台座、光背の各部分の構造を説明した。そのうち、特に本軀については、現状の内部構造を美術院の資料中の像底からみた見取図およびその時の写真をもとに想定図を画いてみたところ、脱乾漆丈六坐像としてその内部の木組の知られている法隆寺西門堂の薬師如来坐像と非常によく似た内部構造であることがわかった。ただ、唐招提寺金堂本尊の場合、像内の内壁に沿って組まれた木枠を、内部で前後左右に支える支えを各段に入れ、中央に地付から頭部まで通ずる心棒を立てて補強している点が異っている。しかし、盧舎那仏は鎌倉時代と江戸時代にかなりの修理を受けており、この支柱が後補の可能性もあり、後補とすれば、西門堂の薬師と内部の構造がほとんど等しくなる。なお、台座については、本文6ページ参照。(星山晋也)